医師

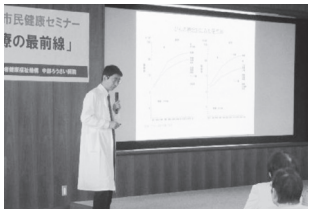
第7回白鳥・市民健康セミナーを終えて

リウマチ・膠原病科医師　野村　篤史

盛況となった会場

平成26年11月8日、当院２Fの講堂において、第７回白鳥・市民健康セミナーが開催されました。今回のテーマは「消化器がん」で、187名の方々の参加をいただきました。私の所属する診療科は基本的にはがんを扱わない科なので、がんについてのセミナーは新鮮でした。参加者の方々に混ざって勉強させていただきましたので、その報告をさせていただきます。

初めに加藤院長代理（現:院長）の挨拶がありましたが、冒頭はクイズで始まりました。「一番患者数の多いがんは？」と、「一番死亡者の多いがんは？」というもので、答えは患者数「①胃がん②大腸がん③肺がん」、死亡者は「①肺がん②胃がん③大腸がん」だそうで（私は間違えましたが）、肺がんと比べて“消化器がんは治療すれば治るかもしれないがんである”ということが強調されての幕開けでした。



橋本先生の講演

講演はまず、外科の橋本先生から「大腸がんの診療の変遷について」のお話で、過去には手術といえば胃がんの手術が多かったそうですが、現在は内視鏡手術の進歩により胃がんは内視鏡手術の比率が多くなっていること、欧米のライフスタイルの広がりにより大腸がんの増加もあり、外科手術では大腸がんの手術の比率が多くなっていること、手術も従来の開腹手術だけでなく内視鏡を使った低侵襲の手術が開発されていることなどの説明がありました。抗がん剤も進歩しており、現在は抗VGEF抗体製剤や、抗EGFR抗体製剤などのがん細胞の特定の分子を標的にした薬剤が登場していることなどの治療の進歩の話題がありました。それから驚いたのは、通常、がんが遠隔転移した場合、根治は望めないということが多いのですが、大腸がんは転移巣を手術で切除すると予後が良いそうで、化学療法で転移巣を縮小させて切除すると根治できるかもしれないということを学びました。

宿輪先生の講演

２つ目の演題は、消化器内科の宿輪先生からの「胃がんの診断から治療まで」というテーマのお話で、胃がん原因や症状、診断や治療についてのわかりやすい説明でした。とくに興味を引いたのはピロリ菌の話と、実際の映像を見ながらの内視鏡手術の説明であったと思います。ピロリ菌の感染があって胃炎があると、胃癌のリスクは５倍になるとの話ですが、参加者からは「ピロリ菌は除菌しすぎると逆に害になるとの話も聞きます」との声や「ピロリ菌は一回陰性ならもう調べなくてもよいか」などの質問があり、ピロリ菌の除菌により逆流性食道炎が増えるリスクもあるということ、一回の検査では偽陰性となる可能性もないわけではないとの説明がありました。

消化器がんに限らないことですが、がんの早期では症状がでないため、健診による早期発見、早期治療が重要であることを再認識し、新しい発見もあって私は大満足してしまいました。活発な質疑応答もあり、参加者の方々にも満足していただけた講演会であったのではないかと思います。